

第1節 資料館における展示・情報公開活動

1. 第42回企画展『特選！吉田遺跡で一番〇〇なモノ』

令和3(2021)年3月後半から当館にて開催が予定されていた第8回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』が、新型コロナウイルス第3波の影響から、主催である学術資産継承事業委員会により中止と決定されたことから、4月は休館することとなった。休館期間に代替となる展示を急ぎ構築し、ゴールデンウィーク明けから開催したのが当企画展である。

展示では『特選！吉田遺跡で一番〇〇なモノ』と題し、本学吉田構内が所在する吉田遺跡から出土した特徴ある考古資料を紹介することとした。吉田の地では、古く昭和初期から土器や石器が採取されており、地下に遺跡が眠っていることが予想されていた。そのような状況下で、当地で最初に発掘調査が実施される契機となったのは、県内各地に散在していた山口大学各学部の吉田地区への統合移転計画であった。昭和41(1966)年から始まったキャンパスの造成工事や建物建設で、土の中から多量の土器や石器が発見されことを受け、本学は学長を団長とし、学内外の関係学問分野の研究者を調査員とした「山口大学吉田遺跡調査団」を結成し、昭和42(1967)年から統合移転が完了した昭和48(1973)年まで発掘調査を行った。その結果、吉田構内のほぼ全域から遺構や遺物が確認され、吉田遺跡が縄文時代晩期から江戸時代まで集落を営み続ける、県内でも有数の複合遺跡であることが判明することとなった。昭和53(1978)年以降は、当館が埋蔵文化財保護を目的とした発掘調査を担当することになり、現在に至っている。

展示では、長年にわたる発掘調査で吉田遺跡から出土した膨大な数の考古資料の中から、「大きい」「古い」「美しい」などのキーワードをもとに厳選した資料を公開した。5月10日(月)から7月21日(水)の会期中、167名の方々に観覧いただいた。アンケート調査では、「ガラス小玉が気になりました」「マツリの歴史や「実用性のないもの」の歴史など、マツリの企画を開催して欲しい」「今回「一番〇〇なモノ」という文言にひかれてここに来ました。一風変わった企画をまたやってほしいです」などの声が寄せられた。

準備期間が短く急ごしらえの展示となったことから、吉田遺跡に関する通史的な視点が欠如し、生活・自然環境の推移なども十分に説明することはできなかったが、「考古学や考古資料に興味をもってもらう」という当館展示の最低限の目的は達せたと思う。



写真1 企画展ポスター



写真2 展示見学の模様

2. 第43回企画展『周防の古代寺院』

令和3年度の企画展は、『周防の古代寺院』と題して、山口県の東部域にあたる周防国地域の寺院跡および瓦の出土が確認されている遺跡を寺院関連遺跡として取り上げて紹介する展示を企画した。

展示は、はじめに仏教伝来による寺院造営のはじまりとその展開に触れ、古代寺院の造営と当時の政治状況とが密接に関わっていたことを示した。次いで、伽藍配置や瓦当文様などの古代寺院を見るにあたっての基本的な用語、瓦の作り方等について説明を加え、各遺跡について個別に解説を行った。今回の展示の対象は白鳳時代から平安時代までの周防国内とし、当該地に所在する古代寺院跡6遺跡、寺院関連遺跡2遺跡の計8遺跡について取り上げて紹介した。

展示品については、防府市多々良廃寺跡で小野忠熈氏によって昭和31(1956)年に採取された瓦を当館で所蔵していることから、それを展示に活用した。その他の寺院跡・遺跡については、(公財)山口県埋蔵文化財センター、山口市教育委員会、防府市教育委員会、光市文化センター、田布施町教育委員会、平生町教育委員会から資料を借用した。各機関のご協力に改めて感謝したい。

展示期間は令和3年8月7日(土)～令和3年10月16日(土)で、会期中167名の方々に観覧いただいた。

【註】

- 1) 白鳳時代から平安時代までの遺跡(多々良廃寺、呉町廃寺、濡田廃寺、周防国分寺跡、御堀遺跡、正坊院遺跡、中村廃寺、東千坊山廃寺)を対象とした。



写真3 企画展ポスター



写真4 展示の模様

3. 山口県大学ML連携特別展『新制山口大学遺跡調査のあゆみ 50'～60'』

山口県内の大学博物館および図書館が、共通テーマに沿って各大学や館の特性を生かした学術資料または教育研究成果の展示を開催するという体制での9年目を迎えた山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携特別展であるが、令和3年度共通テーマは、「あゆむ」に決定され、当館を含め7大学10館が参加した。

前述した通り、本学の吉田地区統合移転に際して「山口大学吉田遺跡調査団」が結成されたのは、昭和42(1967)年のことであり、当館が設立され、構内埋蔵文化財の保護業務を開始したのは昭和53(1978)年のことである。本学は、構内遺跡の調査開始以前も山口県内各地の遺跡調査に長く携わった経緯があることから、当館は昭和24(1949)年新制山口大学創立以降、1960年代までの本学の「遺跡調査のあゆみ」をテーマに展示を構築することにした。

本学の遺跡調査は、考古学的調査ではなく、地理学的調査に始まるのが特徴と言える。それは、考古学専門の教員が主導するのではなく、地理学専門の教員であった小野忠熙氏が調査を主導したことに起因する。また地理学談話会や文化会考古学部など、学生達の活躍が大きかったことも特徴の一つと言える。展示では、本学の遺跡発掘調査歴を年表化し、「活発な踏査」「調査団の結成」「開発工事にともなう緊急発掘調査」をキーワードに、島田川流域遺跡群、美濃ヶ浜遺跡、見島ジーコンボ古墳群、御屋敷山1号墳など、その代表的な調査を紹介し、実物資料とともに当時の調査状況画像を多数公開した。

展示は11月1日(月)から翌年1月31日(月)まで開催したが、新型コロナウイルス感染者拡大(第6波)に伴い、1月12日(水)以降は学内者限定での公開となったこともあり、入館者数は171名にとどまった。アンケート調査では、「山口というどうしても幕末期のイメージがありますが、防人の墓であったり比較的近縁の調査が多く行われていることを初めて知りました」「様々な土器をととても近くで見ることができた。細かいところまで顔を近づけて見たので、作りや模様がはっきりと見ることができ、良かった」「博物館関係の授業で学んだことを改めて感じることができる展示でした。とても勉強になりました」「もっと大規模で迫力のある展示だと、よりインパクトになるし魅力的だと思います」などの声が寄せられた。

山口県大学ML連携事業参加館の中では、当館は唯一の博物館施設である。今後も博物館として恥じることないよう、魅力的な資料展示を心がけていきたい。



写真5 特別展ポスター



写真6 展示見学の様様

4. 山口県立山口博物館テーマ展

『宝山の一角 山大コレクション in 山博ー山口大学学術資産継承事業成果展』に出席

令和2年度末から令和3年度前半に予定されていた第8回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』は、新型コロナウイルス第3波の広がりを鑑み開催中止となったが、令和2年度中より山口県立山口博物館（以降、山口博物館）との共同開催を計画（令和2年度第2回山口大学学術資産継承事業委員会（以降、委員会）にて審議・承認（令和2年11月12日開催））していた当展示については、無事実施される運びとなった。

当館が共催となり、展示室を提供することで開催されてきた『宝山の一角』は、毎年約1,000名の入館者を迎え入れてきたが、その主体は学生であり、本学が有する貴重学術資料を地域社会に広く公開する役割を十分に果たしているとは言えない状況が続いていた。その原因の一つは、土・日・祝日が休館という当館の運営状態にあることは明白であった。筆者は委員会内に設けられている博物専門部会長でもあり、学外開催の必要性を痛感していたことから、委員長および委員会事務局と相談の上、まずは当館と連携協力協定を結んでいる山口博物館での開催の可否について、山口博物館学芸員諸氏と検討していた。令和2年度にいたり、山口博物館での「テーマ展」として開催することが決定されるとともに、展示の共通テーマを「やまぐち」とすること、本学はテーマ展コーナーで複数分野の学術資料展を開催し、山口博物館は常設展にて関連資料を展示すること等が定められた。また委員会においては、以下の開催目的が示されることとなった。

「委員会がこれまでに実施した各学術資料への事業成果と山口博物館の各研究分野のコラボレーション展示を、実物資料公開と研究成果解説により実施する。当展示は、市民に対し山口県に存在する貴重学術資料に触れ、学ぶ機会を創出するとともに、山口県の基幹総合大学と基幹総合博物館との新たな官学連携活動の嚆矢となることを目的とする」

展示は令和3年4月28日（水）から6月20日（日）の期間で開催された。本学からは、考古資料として当館所蔵の見島ジーコンボ古墳群および筈倉古墳出土資料（写真10）を、人文学部からは経塚関連資料（写真7）などを出展した。そのほか、商品資料として経済学部所蔵の山口県産陶磁器を、鉱物・岩石資料として理学部・工学部所蔵の県内鉱山産出鉱物標本や山口県を構成する地質系統の岩石標本（写



写真7 設営作業（考古資料WG）



写真8 設営作業（鉱物・岩石WG(理学部)）

真12)を、生物標本として共同獣医学部所蔵の山口県生息哺乳類の全身骨格標本(写真9・11)を、文書史料として図書館所蔵の榎野川改修関連文書(林家文書・本間家文書)を出展した。

また、新型コロナウイルスの影響により、展示解説日を設けることができなかったことから、文書史料を除く各学術分野の動画解説を、YouTube本学公式チャンネルにて公開した。

展示終了後、山口博物館より会期中入館者総数が2,070名^{註2}であった旨連絡があった。本学所蔵貴重学術資料が学外者の目にとまる機会となったことは間違いなく、一定の成果があったと思われるが、次年度以降の通常開催に向け、共催館としての当館の果たす役割を再考する必要性も感じられた。

【註】

- 1) 平成24年度第1回から平成28年度第5回開催までは、当該年度中(2～3月)の土曜日は開館していたが、開館担当者が繁忙な年度末に代休を取得できない状態が続いたことから、翌平成29年度第6回以降は、ミュージアムトーク(展示解説)日のみ土曜開館することとなった。
- 2) 山口博物館への入館者数であり、テーマ展見学人数を直接示す数値ではない。



写真9 展示室入り口



写真10 展示風景 (考古資料WG)



写真11 展示風景 (生物資料WG)



写真12 展示風景 (鉱物・岩石WG(理学部))

5. 第8回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』を共催にて開催

令和4年3月22日(火)から7月15日(金)を会期として、当館展示室で3年ぶりの開催となる第8回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』を開催した。

当館は近年、学術資産継承事業として吉田遺跡出土古代官衙関連木製品の保存処理と樹種同定を行っているが、コロナ禍中に平成20・24年度に出土した木製品の処理を終了し、引き続き平成26年度出土の木製品^{註1}に着手していたことから、横槌、木錘、曲物底板など平成26年度出土品で保存処理を終えた資料を出展した。

その他の出展は、同じく考古資料として片山古墳(防府市)出土耳環・鉸具(人文学部所蔵)^{註2}、鉱物・岩石資料として最古(地球・日本列島・山口県)の鉱物と岩石(理学部地球科学標本室所蔵)、生物標本資料として山口県に生息する哺乳類の交連骨格標本^{註3}、美術資料として西村陽平作品「立体(題不詳)」(教育学部所蔵)であった。

会期中、375名の方々に観覧いただいた。アンケート調査では、「資料の修復・保存・デジタル化作業の過程を紹介する展示をして欲しい」「骨だけでなく、その動物の写真も見たい」「山口県出身の画家や彫刻家の展覧会を開催して欲しい」など、多くの声が寄せられている。

令和4年度中は、新型コロナウイルス感染症の位置づけが「新型インフルエンザ等感染症(2類相当)」に維持されたこと、授業での当館の活用が減じたままであったこと、学内イベントがインターネット開催に移行しており、来学者が減少したこと、当館もマスメディア等への広報活動を控えていたことなど、様々な要因で入館者数が伸び悩んだが、アンケート調査での観覧者の反応を見る限り、展示内容は概ね好評であり、少なくとも事業の可視化責任の一端は担えたと考えている。

【註】

- 1) 横山成己(2019)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報12ー平成26年度ー』, 山口
- 2) 参考資料として、人文学部所蔵品と同時期に片山古墳にて採取された杏葉1点を、山口博物館の協力により出展いただいた。
- 3) 展示品は、ニホンザル・イノシシ・タヌキ・アナグマ・アライグマ・テン・ニホンノウサギ・ヌートリア・キクガシラコウモリ・アブラコウモリ・アカネズミ・カヤネズミ・カワネズミ・クマネズミ・ハツカネズミ・コウベモグラ・ヒミズの17点。



写真 13 展示の様様



写真 14 展示見学の様様

6. 令和3年度刊行物

1. 『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成29・30年度－』

平成29年度末から翌30年度前期にかけて、吉田構内にて福利厚生施設新営に伴う発掘調査を実施したことから、平成29年度から30年度に実施した資料館活動報告と構内遺跡発掘調査概報を1冊にまとめた年報を刊行した。両年の活動報告としては、展示・情報公開活動として3回の企画展とそれぞれ2回の山口県大学ML連携特別展、山口大学学術資産継承事業成果展のほか、計4冊の当該年度刊行物を報告した。社会教育活動としては、山口博物館との連携により実施した講座1件ずつを報告した。両年の発掘調査に関しては、本発掘調査1件(吉田)、予備発掘調査1件(吉田)、立会調査19件(吉田14・白石1・小串3・光1)の成果を報告した。予備・本発掘調査1件は、前述の福利厚生施設新営に伴うもので、吉田構内の中央部において、古墳時代中期中ごろの4棟の竪穴式住居跡からなる集落跡を確認し、初期須恵器など貴重な遺物が出土した。

付篇として、同調査において1号竪穴式住居跡から出土した炭化物の年代測定および樹種同定報告(渡邊正巳氏:文化財調査コンサルタント株式会社)を所収している。

2. 『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅠⅩ』

当年報は当館設立以降から平成14年度までの構内遺跡調査成果を報告するものである。令和3年度は、平成11年度に実施した調査報告を所収した年報を刊行した。事前調査1件(小串)、試掘調査1件(光)、立会調査7件(吉田6・光1)の成果が報告されている。そのほか、田畑による「山口市荻峠遺跡出土土器について」と題する付篇を所収している。

光地区の試掘調査では、古墳時代中～後期の遺物包含層が確認されており、韓式系土器を含む土器類の報告がなされている。

3. 山口大学埋蔵文化財資料館通信 第32号『てらこや埋文』

速報性を重視した当館広報誌であり、平成23年度以降は年度末に1度の刊行となっている。巻頭頁に展示活動を、2頁に山口博物館との共催事業「古代ウォーク」実施報告を、3頁に「資料館この一品」として吉田遺跡出土の円面硯を、4～5頁に遺跡めぐりサイクリングコース「山口盆地」の紹介記事を、6～7頁に令和3年度末に退任する根ヶ山徹館長のインタビュー記事を掲載した。

4. 館蔵品調査研究年報7『見島ジーコンボ古墳群 東部域出土資料調査報告』

現在国史跡に指定されている見島ジーコンボ古墳群において、昭和35(1960)年に山口県教育委員会および萩市教育委員会により分布調査が実施された際に採取された資料のうち、当館に所蔵されている古墳群東部域所属品の悉皆調査を実施し、その成果報告を行った。



写真15 令和3年度埋蔵文化財資料館刊行物